祝婚

上田三四二

祝婚

上田三四二

新潮社

祝婚

一九八九年一月二五日発行
一九八九年七月三〇日九刷

著者　上田三四二
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話（業務部）03―二六六―五一一一
（編集部）03―二六六―五四一一
振替　東京四―八〇八
印刷　株式会社光邦
製本　大口製本株式会社
価格は函に表示してあります。

© Tsuyuko Ueda 1989,
Printed in Japan

（乱丁・落丁本は，ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

ISBN4-10-354602-6 C0093

目次

祝婚……5
詩人……35
故山……77
「月光」ほか……103
たまもの……137
西湖の蓮……167

装画　牧　進

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

祝

婚

祝

婚

旅ごころは風景をあたらしくする。

新幹線の窓からみる東京の街は、有楽町界隈の見慣れた建物のたたずまいも、新橋を過ぎてひらけてくる浜離宮あたりの眺めも、はじめてのように新鮮だ。白い雲が浮かび、光が遍満していた。桜が咲いていた。花はおもわぬ狭い囲いのなかにもあった。高架から見下ろす視線はあるところでは街筋のとおくにまで及んで、平遠な眺めの奥の霞にはこころをそそるものがあった。奥には海があるはずだった。

列車は品川をすぎたところで大きく迂回して風景をひと振りしたあと、一路、どこまでも延びる街衢を分けて広い河原のある多摩川に出、軽快な音に河幅を挽き終ると、横浜はもうそこだ。

彼は窓際の席にいる。通路側に妻を坐らせるのはこれまでにないことであったが、病

後はじめての遠出とあって、しぜんにそうなった。荷を持つのも、網棚にあげるのも、女手にまかせて、身ひとつを運んで座席に着き、コートを膝掛がわりにして外をながめている。京都まで三時間足らずの旅が、何だかひとかどの旅のように思われる。満席だが、昼ちかい列車はこの季節のものとしては落着いている方だ。検札も妻にまかせて、済むと、長年の連れ合いは話すこともないまま、寛ろいだ。車中の時間をきまって読書に当ててきた彼の長年の習慣は、捨てられていた。

一緒に出る機会はめったになかったが、そういうときでも彼は時間が余りさえすれば書斎のつづきのように文字の羅列のなかにこころを沈めて、取り残された妻の胸のうちを顧みることをしなかった。顧みたとしても、習慣をあらためるにはあまりにも余裕のない時間のやりくりを、彼は毎日の自分の上に課して生きていた。

『いまは毎日が遊びのようなものだ。いまは、生きているのが位だ。』

還暦の歳に襲ったおそろしい病気が、生活を根底から変えていた。歳が還るのを待っていたかのように、体が変わり、こころが変わった。他人から見ればただの衰えにすぎないものも、病いを凌いできた者の受け取りようはまた別であった。彼はかつてない閑暇に身を置いて、それを後ろめたく思う必要のない自分を一方では憐れみながら、そういう暮しの許されているいまの身の上を、何ものかに向って感謝した。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

夫と妻はシートを並べて目まぐるしく移って行く窓外の景色をともにしていた。市街地を抜けると田があり、森があり、遠景に丘があった。人家が点在し、人家はまた集落をなしていた。地はさかんな若葉の季節を迎えようとして、裸木の梢はうす紫にけぶり、いたるところにほの白い桜の花を浮かべていた。年ごとに、何十回となく見てきた春の景色が見飽きることのない親密さをもって近づき、遠ざかり、眺めは尽きることなく展開していた。

「どこもかも、桜だね。」

「――ほんとに。」

会話はそれで途切れる。自分の胸に問うているようなものだと彼は思う。

「京都は、すこし遅いかな。」

「ちょうどじゃないでしょうか。」

思い出す。曼殊院をたずねたのは一昨年の今ごろであった。詩仙堂に遊んだついでに思い立って、そこから歩いた。民家のあわいにおもむきのある小さな寺の門などのひらく狭い道を辿った。道端に蓮華田のあらわれるあたりで間道は尽き、広い道に出る。目指す寺はその道のみちびく坂の上にあった。

京都に育ち、結婚してからもながくその地に住んできた妻が詩仙堂を知らないのをあ

われんで、用の出来たのをさいわい、実家への挨拶をもかねて、連れ出したのだった。曼殊院はま盛りの花につつまれていた。思いがけなかっただけ喜びは大きかった。門前ちかくに水神を祭る林泉があって、そこの茶店の緋毛氈を敷いた床几に休んだ思い出は、生死を分けるほどの病気を中にして遠い記憶のようにも、また昨日のことのようにも思われる。彼は歩くことの苦手な妻の足を心配したのであったが、一日の行楽を終ってみると、休みたがったのは彼の方だった。体調はそのころから狂いはじめていたのだと思いあたる。

体調に狂いが生じるよりすこし前のころから、彼はつとめて妻を旅に誘うようになっていた。仙台に出掛けたときは、一日をあけて松島をめぐった。松阪市に招かれたのを機会に、賢島まで足をのばして、妻が食べたがっていた、雑誌などによく紹介される研究熱心なシェフのいるホテルのフランス料理を一緒に楽しむこともした。奈良に遊んで、妻にははじめての寺々を選んで観てまわった日の暮れがた、偶然に春日神社の薪能に行き会った仕合せもあった。また炎暑の一日、蒲郡（がまごおり）に宿をとったのも、その海岸の由緒あるホテルが妻の少女時代の憬れを誘ったものであったからだ。

夫と妻という長年にわたる共同の生活にあって、彼らはこれまで、回想を頒ち合い楽しみ合えるような共通の思い出をほとんど持たなかった。若いころは生きるのに精一杯

であった。夫は勤めに追われ、妻は子供に手をとられた。中年になって、夫に交際の範囲がひらけたが、それは勤務とはべつの趣味にかかわる文学上の仕事が趣味の領域を越えるようになったためであった。来客は増え、会合の数も重なり、呼ばれて地方に旅する機会も多くなっていった。机に向う時間を得るために、家庭での寛ろぎはもちろん、睡眠の時間も切り詰めねばならなくなった。妻は夫の名が知られるようになっていくのを喜ぶこころの一方で、そこに内助の功とでもいうべきものの入り込む余地のまったくないのを悲しんだ。妻は夫の世界から隔てられていた。不幸なことに、夫婦は趣味を同じくするようには生まれついていなかった。

離れの客間で夫が彼女の理解のそとにある世界からおとずれる婦人たちと長い親密な時間を過ごすあいだ、また何人かの若い人たちを迎えて歓談に夜を更かすあいだ、妻は茶の間にあって孤独な時を持てあまさねばならなかった。そしてあとには、机に向って為すべき仕事が夫を待っていた。

夫の不在はいっそう妻を孤独にした。孤独ばかりではなかった。そこにはおそろしい想像さえまじらないではいなかった。妻は寡黙になり、殻にこもるようになった。苦しみから逃れるために、茶の湯の会や料理の講習に夫とは別の生活の場を持とうともしてみた。けれども、かくべつ好きでもないそうした稽古ごとによる対応がこころのしこり

を解き放つにいたらないことははじめからわかっていた。妻の苦しみは夫への無言の抗議となって内攻を重ねていった。妻は自分をいい妻だとは思っていないのだった。居直りが、事態をいっそう悪くした。

夫婦は言葉に出して争うことはしなかったが、それは言葉に出して争うよりも悪い兆候だった。度量のせまい夫は、妻の訊かず、責めず、訴えぬ、氷りついた面を融かすべき暖かな風を用意するかわりに、彼自身の衿元をひきつくろった。行く先を告げぬ外出は深夜の帰宅になった。そして寝静まった家にかえることに、夫はかえって安気を覚えるようになっていった。

情こわく耐えてきたこころの折れる日が来た。ながい年月にわたる緊張は、或る日、妻の涙ながらの訴えによってあたらしい局面を迎えた。

妻は夫の行状を疑っていた。疑いながら、知ることを恐れていた。

夫の帰宅は早くなった。限界を越えたことで脆さをかくさなくなった妻の神経は、夫のちょっとした言動にも敏感に揺れうごいた。彼は出ないですむ会合は、つとめて休むようになった。集りがあとを引くようなときは、立つころあいに気を配った。

夫婦はながいあいだ忘れていた平穏な顔を、茶の間の卓に向い合わせるようになった。そうして機会を見付けては、列車のシートに肩を並べるようになった。

海が見えてきた。右手、反対側の窓に山が迫った。短いトンネルがあった。見おろす春の入海は凪いで、中ほどに丸やかな一つの島を霞ませていた。窓下の急な傾斜には海際にまでひしめく建物が見え、そこにも桜が咲いていた。ひかり号は熱海の駅を目もくれぬ速さに擦過した。

彼は傾けていた座席を元に戻して、渡された幕の内弁当を開いた。

このたびの京都行きは遊山ではなかった。

東播州の彼の郷里から五里ばかり奥の、母の里である織物で知られる町に、一つちがいの従弟が代々の業を継いで医院をいとなんでいる。その次女が京都の医家の次男と婚約したと聞いたのは前の年の秋であった。次男は大阪の大学で研究が終るのをまって、亡父の残した敷地のなかに、兄が引継いでいる医院と並んで、あたらしく歯科を開くことになっていた。結婚は新規開業と同じ陽春の季節がえらばれた。

男きょうだいのないこの従弟と、一人っ子の彼とは子供のころから兄弟のように親しんで、旧制の高等学校もいっしょなら、大学も同じ医学部に進んだばかりか、専攻も示し合わせたわけではないのに共に内科を選んで、三つある医局のうちの同じところに入った。臨床を終ったあとの研究室でも、二人は班がいっしょだった。

高校生のころ、彼らは北白川の下宿に部屋を隣り合わせた。そうして近くの学生相手

の食堂の丸椅子に坐って、豆粕や玉蜀黍の混ざった丼飯に飢を凌いだ。外食券の要る時代であった。春の終りの或る日、入浴を終ってシャツを着けていたとき、番台のラジオが「アッツ島玉砕」のニュースを告げた。二人は、顔を見合わせた。母親が姉妹同士であるもうひとりの従兄がその島にいることを彼らは知っていた。ラジオは亢奮した声に大本営発表を繰返した。

その年の夏のころからであっただろうか。まだ人家のすくない下宿のあたりは空地や道端に蓖麻が植えられて、柱頭の赤い、暑くるしい花をつけた。飛行機か何かの粘滑油の代用品に使うとかで、国策として奨励されていた。

二人はまた大学生のころ、終戦をあいだにはさんで、吉田山の麓に下宿した。従弟は郷で開業する父親から医療用に配給されたコンデンスミルクを貰い受けてきて、彼も恩恵にあずかったことがあった。思い出といえば、まず食のことであった。

研究室に入って間もなく、従弟は父の急死に遭った。郷に帰ってあとを継いだが、研究はつづけることにして、週のうち二日ばかりを京都に出てきた。犬を使ってする実験は多く夜におよんだ。片付けが終ると、二人はよく連れ立って街に出た。木屋町のあたりに従弟の開拓したバアがあった。馴染の料理屋もあった。そのころ郡部にある療養所に勤めて研究日を通ってきていた彼は、帰るきっかけをうしなって従弟が借りている近

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo